

朱夏の女たち

〈上〉

五木寛之

五木



朱夏の女たち

上

五木寛之

朱夏しゅうかの女たちへよ

定価——九八〇円

発行日——昭和六十二年五月三十日 第一刷  
昭和六十二年八月五日 第三刷

著者——五木寛之

発行者——大沼 淳  
発行所——文化出版局

電話——東京都渋谷区代々木三—二二—一 郵便番号一五—  
(〇三三三七〇—三一一—(大代表)  
(〇三三三七九—一三〇—(販売直通)

振替——東京二—一九五六七〇番

印刷所——大日本法令印刷(株)、(株)文化カラー印刷  
製本所——大口製本印刷(株)

©Hiroyuki Itsuki 1987 Printed in Japan

ISBN4-579-30281-8

朱夏の女たちへ上目次

|     |               |     |
|-----|---------------|-----|
| 第一章 | サイベリアン・エクスプレス | 5   |
| 第二章 | インドへの旅        | 25  |
| 第三章 | 榛名朋子の性的反抗     | 98  |
| 第四章 | 井上樹理の不安と夢     | 119 |
| 第五章 | 笙七重の大胆な野心     | 137 |
| 第六章 | 幸福という名の鎖      | 157 |
| 第七章 | 著名作家との一夜      | 178 |
| 第八章 | マセラティに乗った青年   | 199 |
| 第九章 | 愛でなく遊びでなく     | 222 |
| 第十章 | 女が男を誘惑する時     | 244 |

装幀／松永 真

絵／ペー  
ター佐藤

# 朱夏の女たち

〈上〉



## 第一章 サイベリアン・エクスプレス

プリンターから乾いた音とともに吐きだされる印刷原稿をとりだして枚数をかぞえ、クリップでとめると、<sup>しやうなえ</sup>笙七重は大きく両手をあげて背伸びをした。

<sup>まぶた</sup>瞼の裏に、かすかな涙の感触があった。

——疲れたなあ。

このところ、根をつめて何時間もワープロのキーを叩いた<sup>たた</sup>あとは、いつもこうだった。いくら高解像度ディスプレイとはいっても、鋭く光るグリーンの文字を凝視しつづけたあとは、頭の芯に火<sup>ほ</sup>照<sup>て</sup>るような疲労が残る。

七重はフロップピーのレバーをもどし、電源を切った。軽い音とともに画面から蛍のような光の点が消え、さつきまで生きもののように働いていた機械の鼓動がとまった。

七重はその瞬間が嫌いだった。スイッチを切ると同時に、あれほどの能力をもつワードプロセッ



サーが、たちまち灰色の鉄の塊になってしまふ。なんだか指先ひとつで物の命を断つような、どことなくうとましい感覚がその操作にはある。

いつかそのことを村木映子に言ったら、笑われてしまった。

へそれは逆なんじゃない？ 本当はわたしたちのほうが、機械に使われてるような気がするけど、  
そう彼女は言ったのだ。

たしかにそうかもしれない、と、七重も思う。その証拠に、ひと仕事おえて、こちらがこんなに疲労困憊ひろうこんぱいしていても、ふたたびスイッチさえおせば、相手はふたたび何十時間でも平然と働きつづけることが可能なのだから。

七重は両手の指の腹で、目の上を指圧するようにおさえた。そんな自分の姿は、他人の目には、背中をまるめ、手で顔をおおって嗚咽おえうしている老女の姿のように見えるのかもしれない、と、ふと思った。

彼女は頭をふって顔をあげた。壁にはつてあるアントニオ・ガウディ展のポスターへ視線を向け、自分はまだ若いのだ、と考えた。

——若い？ 本当にそうだろうか。

古代の中国人は、人生を四つの季節にたとえたという。

《青春》、《朱夏》、《白秋》、そして《玄冬》。

七重はそのことを思い出した。三十四歳という年齢は、当然のことながら《青春》などという気

恥ずかしい季節からは、はみだしている。といって、へ白秋の女、というほど透明な気分でもない。  
——朱夏<sup>しゆか</sup>のひと。

と、いう言葉が頭の奥のスクリーンに横書きの緑色の活字で浮かびあがった。へひとという仮名を漢字に変換<sup>へんかん</sup>しようと、無意識に指がうごいた。仕事を終わっても、まだ体には余熱がのこっているのだろう。七重はため息をついて椅子から立ちあがった。

「おわたの、ナナエ」

部屋にひとつしかない窓のそばの机で、分厚い広辞苑をひいていた村木映子が顔をあげて声をかけた。

「うん、とりあえずね」

「じゃあ、こつちへちようだい。私がざっと目を通して、トシちゃんに帰りがけに創潮社<sup>そうしや</sup>にとどけてもらうから」

映子は辞書をとじると、七重のデスクのところへやってきた。遠近両用の眼鏡をかけ、カーリー・ヘアの頭にトレーナーの上下という映子の恰好<sup>かっこう</sup>は、どう見ても性別不明といった感じだ。

彼女は七重より十歳ほど年上で、四年前に女性だけ三人のグループではじめたこの速記事務所の代表者である。以前に私立女子高の教師をやっていたという話をきいたことがあるが、七重と知りあったときは神保町<sup>じんぼう</sup>の小さな出版社で編集の仕事をやっていた。やがてその出版社が不渡りを出し、映子はしばらく失業保険で食いつないだ後に、このへオフィスQという速記事務所を創立した。

七重とは、映子の編集者時代につきあいがはじまっている。ほぼ六年ほど昔の話だ。

「最近どうも目が疲れてしかたがないの」

と、七重は原稿を映子に渡しながら言った。

「なんとかアンバー・イエローのディスプレイを入れられないかしらね」

「IBMにでもご相談あそばせ」

映子は印刷された原稿に目を通してながら、肩をすくめた。七重はかまわずに、

「それに専用の車も必要だわ。あがった原稿をいちいち地下鉄乗りついで出前してたんじゃ、仕事にならないもん」

七重の言葉に映子はうなずいて、

「うん、わかつてる。でもね、ナナエ」

「いいの。要求してるんじゃないから。ただ希望をのべただけ」

「絶望の虚妄きやもうなること希望に同じ、よ」

映子は昔から口癖くちぐせの魯迅ろしんの有名な言葉を呪文じゅもんのようにつぶやくと、自分の机にもどって原稿をめぐりはじめた。

「古いんだから、もう、社長は」

七重は日にいちどはきかされる映子のその大好きな文句に、ちよつとうんざりした気分のため息をついた。

「どうしてこの部屋には、窓がひとつきりしかないんだろうなあ」

「家賃が安いからね」

映子の答えはいつも明快だった。そしてそれは常に正しい。はじめのころ、手書きの速記だけでやっていた頃にくらべると、三台のワードプロセッサを使うようになった今は、たしかに仕事の範囲はひろがってはいる。しかし、そのための経費も、また馬鹿にはならなかった。

都心から離れた私鉄沿線の裏通りに、バイク屋のガレージの二階を借りて「有有限会社・オフィスQ」の看板を出すだけでも、かなり大変なことなのだ。陽のあたる大企業のOLみたいな贅沢が許されないくらいのは、七重にもよくわかつていた。しかし、それでもなお、七重はなにか自分の今の生活について納得のいかないところがあった。床の下から響いてくるバイクのエンジン音や、焦げるオイルの匂いなどが彼女は嫌いだ。昼間から蛍光灯の白い光の下で、何時間も、ときには徹夜で髪をふり乱し、血走った目を光らせながら機械と向きあっている生活だけが、自分の生き甲斐とは思えない。こんなふうにして今日まで、三十歳から三十四歳までの人生が過ぎていったことが七重には口惜しかった。そしてこれから先もずっと窓のひとつしかないこの部屋で、自分の三十代の時間がこのまま流れてゆくことを考えると、体から力が抜けてゆくような気がする。

「ナナエさん、電話とって」

こちらに背中を向けて座談会のテープ起こしをやっている水尾敏江が、肘で受話器をおしやって言った。彼女は急ぎの仕事で、朝からずっとキーボードを叩きつづけていた。デスクの下で録音再

生用のボタンを足で操作しながら、彼女はミシンの手内職でもやっているような風情で仕事に没頭（ぼつとう）している。

「ごめん」

七重は手をのばして受話器をとった。

「はい。オフィスQです」

「ナナエでしょう？ 声ですぐわかるわ」

太い男の声のようなアルトだった。向こうの声のほうがよほど特徴がある。それは七重の十年ごしの（信友）井上樹理（いとうきゆり）の声だ。

彼女はかつて高校生のころ、テストの答案に（親友）と書くべきところを（信友）と書いて教師を嘆かせたという伝説の持ち主で、そのエピソードをきいて以来、七重は彼女のことを（信友ジュリ）と呼んでいた。中学生時代に水泳の選手で活躍したこともあるというスポーツ万能の悪友である。

「しばらく、ジュリ」

「仕事、いそがしい？」

「うん。まあまあね」

「そう」

樹理はちょっと言葉を切ってひと呼吸いれた。受話器の向こうでリズム楽器の音と、外国語らし

い男たちの声が、かすかにきこえた。

「じつは、今夜、〈信友会〉をやるうと思うんだけど」

「え？　今夜？　ずいぶん急な話じゃない。どうしたの」

「〈信友会〉というのは、樹理と七重、それにもう一人、榛名<sup>はるな</sup>朋子<sup>ともこ</sup>という仲間が、月に一度くらいのわりで集まる雑談の会のようなもので、彼女たちが知りあつてからずっと続いている気楽なパーティだった。これという決まりもなく、成りゆきでやってきたのだが、それがかえつて永続した理由だったのかもしれないかった。

「じつは、トモがぜひ話したいことがあるつて。さっき電話かけてきて、そういうのよ。なんだかふだんとちがう雰<sup>ふん</sup>囲<sup>い</sup>気<sup>き</sup>でさ」

「へえ。トモがね」

「うん。いつも無口なあの人、へんに早口で、強引なのよ」

「いいわ。何時にどこで？」

わたしの店に六時、と、樹理は言った。

「夕食おごるわ。たまには和風の小座敷なんかどう？」

「悪くありませんねえ」

「じつは——」

樹理の声がすこしひくくなった。

「わたしのほうにも、ちょっとご兩人に話しておきたいことがあるんだ」

「話ねえ。例のスウェーデン人のエンジニアとは、もう切れたんでしょ？　こんどはこの人？」

「ちがう。ちがうったら。もっとまじめな話よ」

「そう。ごめん」

「まあ、どうせわたしのことから、ナナエにまともに取り合ってもらえないとは思うけどね。あとで話すわ。今夜、すこしおそくなってもいいんでしょ？」

「そのつもりで行くわ。じゃ六時に」

「はい」

電話は向こうから切れた。

——　なんだか変だな。

七重は受話器をゆっくりもどしながら、首をひねった。

いつもなら、オーケイ、とか、ウィ・ダコールとか、弾むような調子のいい電話の切りかたをする樹理なのに、いま彼女はたしか、〈はい〉と、しおらしく言ったような気がする。

——　なにがあつたんだろう？　それにトモの急用というのは一体なにかしら。

七重はスチール製のデスクの端に、黒のコーデュロイのパンツに包まれた少年のような尻しりをのせたまま、〈信友〉の一人である榛名朋子の童女めいた横顔を頭の中に思いえがいた。

「またあの人たちと会うの？　ナナエ」

と、ぼんやり考えにふけっている七重に映子が声をかけた。

「うん」

「わたしにはどうしてもわからないのね。あんたみたいな地味な人が、どうしてもあんな女たちとつきあっているんだろう。不思議でしかたがないわ」

「わたしもよ」

七重が笑って言った。映子は呆れた<sup>あき</sup>というように頭をふる、

「片方は国籍不明みたいな遊び人で、もう一方は絵に描いたような有閑<sup>ゆうかん</sup>マダム。あんたとは生活水準も、知的水準も全然ちがう人たちだもの」

「うん。ひよっとしたら、そうだからうまくいつてるのかもしれない。わたし、自分に似たタイプの人たちって、苦手だもん」

「そういえば、木崎青年って、あんたに似てたわね。いい人だったけど」

「いいの。そんな昔の話」

映子は原稿に視線をもどしながら、ため息をついて、

「この行動哲学っていうのは、行でなくて皇だと思うわ。戦争中の国家主義思想の話だもの。皇道哲学が正しいんじゃない」

「どうちがうのよ、それ」

「戦後生まれの人に説明しても無理かもね」



村木映子は優しい口調にもどつて、七重を追いやるように手をふった。

「約束、六時でしょう？ 原稿はわたしがチェックしておくから帰っていいわ。あすは、例の対談のほう、よろしくね」

「ええ」

七重はうなずいて時計を見た。すでに五時ちかい時刻だった。横浜の樹理の店まで、電車で行つてちよいどいい時間だ。わき目もふらずに仕事に熱中している敏江の背中に、すこし気がとがめるものを感じながら、七重はデスクの上を片づけはじめた。

私鉄の駅へ向かう暮れがたの道を、しょうななえ 笹七重はゆつくりと歩いていった。

このあたりは閑静な住宅地で、駅の西口から先の商店街とは別天地のような落ち着いたたたずまいである。道路の左右に、手入れの行きとどいたいちぢやう 銀杏の並木が金色のトンネルのように続いており、落葉が風に掃かれるように路肩に吹きよせられていた。

その夏はアフリカ内陸部で記録的な早魃かんばつが発生した年だったが、東京も秋口のはじめの頃まで猛暑がつづき、それから一転してセーターが恋しいような涼しさに変わった。

モスクワでは九月に雪が降ったという新聞記事が見られたりもした。気のきざしが訪れているという新聞記事が見られたりもした。

——サイベリアン・エキスプレス——。たしかそんな言葉だったんじゃないかなかったかしら。